

0 KICHI



加賀百万石の高度で豊かな文化が生んだ九谷焼。創始から約370年。 脈々とその彩りと技能を引き継ぎ発展させてきた陶の名工たちがいる。 古九谷を再現した上絵付の名人・初代徳田八十吉、伝統技法を革新した 二代、彩釉磁器で人間国宝となった三代、三代の耀彩に赤の表現で彩釉 の新境地を開く四代。

この度、緑ヶ丘美術館では初代徳田八十吉生誕150年を記念して古九谷 の再現に尽力した初代を中心に歴代四人の徳田八十吉が表現した九谷 をご紹介いたします。八十吉陶房に伝わる「自分だけの九谷」に挑戦し た名工たちの作品をご覧ください。



代にわた の創生をつないできた

五.

[緑ヶ丘美術館 特別企画

Tokuda Yasokichi

四代作:彩釉壷猩々

2023年9月23日 = ~ 12月24日

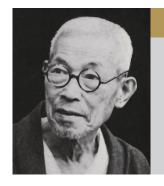
[開館日]水・木・土・日曜日 11:00~16:00 (入館は15:30まで) ● 入場無料 [休館日] 月·火·金曜日

[会 場] 緑ヶ丘美術館・別館 → 〒630-0262 奈良県生駒市緑ヶ丘 1426-38

【URL】http://mam-museum.com 〈お問い合わせは FAX で: FAX. 0743-85-7879〉

緑ヶ丘美術館・別館

Y A S O K I C H I



初代德田八十吉(明治6年~昭和31年)

石川県能美郡小松大文字町に生まれる。九谷の陶工・二木喜助の異父 弟、松本佐平の義弟。 荒木探令(後の狩野探令)から日本画を、佐平か ら陶画を学び、古九谷、吉田屋の作風の再現に熱心に取組んだ。茶道 では「柳陶斎」、俳句では「鬼佛」、画では「公暉」の号を持つ。自作には「九 谷八十吉」の銘を用いた。また若い頃から釉薬の改良と創製に腐心し、 独自の彩釉を発明して「深厚釉」と名付けた。二代浅蔵五十吉や、養子 となり弟子入りした二代目(外次)、三代目(正彦)の師として教えを授 ける。1953年、「上絵付(九谷)」の分野で助成の措置を講ずべき国の 無形文化財に選定される。





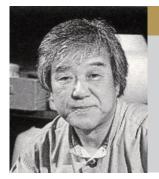
古九谷欽慕捻瓢形徳利

二代德田八十吉〈外次〉(明治40年~平成9年)

石川県能美郡山上村で醤油商の五男として生まれる。初代 徳 田八十吉の養子となり弟子入り。国立陶磁器試験所(京都)で 伝習生として学び、その後、富本憲吉のもとで7年間陶画を学 ぶ。初代のもとで釉薬の開発に努め、上絵艶消釉や上絵窯変 釉の創作、ロクロ成形する練り込み技法「湧象」の開発など新 技法にも尽力した。1956年、49歳で二代 徳田八十吉を襲名。 1975年、石川県指定無形文化財に認定される。近代的な九谷 焼きを推進し、海外でも受賞する。1988年、八十吉の名を長 男(正彦)に譲り百吉を名乗る。



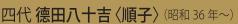
青手色絵松鶴図九角飾皿



三代 **德田八十吉〈正彦〉**(昭和8年~平成21年)

石川県能美郡小松町に二代 徳田八十吉の長男として生まれる。祖父・ 初代 八十吉から古九谷の釉薬の調合を、父である二代 八十吉の陶房で 絵付け等の技術を学ぶ。古九谷の五彩(赤、黄、緑、紺、紫)のうち、赤 を除く四彩を組み合わせ焼成し、200色以上の中間色を開発。美しい グラデーションを作る「耀彩(ようさい)」の技法を生み出し、後の三代 徳田八十吉の名を不動のものとした。1988年、54歳で三代徳田八十 吉を襲名。日本伝統工芸展や国際陶芸展などで様々な賞を受賞し、海 外でも積極的に活躍、九谷焼を広めた。1997年、重要無形文化財「彩 釉磁器」保持者(人間国宝)に認定される。





石川県小松市大文字町にて人間国宝・三代 徳田八十吉の長女として生 まれる。NHK金沢放送局のニュースキャスターを経て、石川県立九谷 焼技術研修所で陶芸を学ぶ。三代八十吉から薫陶を受け、伝統ある九 谷焼の釉薬調合の技術を発展させる。彩釉磁器の様式を受け継ぎ、三 代にはない独自の「新赤」の色彩を発揮した美しい色彩のグラデーショ ンの作品が特徴。扉が開く隙間からこぼれ指すが如くの光のグラデー ションが爽やかで印象的。2010年に四代 徳田八十吉を襲名。三代の 耀彩技法を進化させた四代の逆焼技法の作品・彩釉花器「昇龍」は大英 博物館の収蔵となるなど海外でも高い評価を得ている。

ばれるものは再興九谷以前の作風で、

九谷の時代が始まります。古九谷と呼

日本の色絵磁器の代表として高い評

後に再び加賀藩営で窯が開かれ、 窯は閉じられました。その約100 います。その後1700年初頭に突然



たいと思います。そこには歴代の德

十吉だけでなく、

世界的な陶芸

丁吉の個性を、作品を通して辿ってみ

本展では、それぞれに異なる德田

九谷焼を牽引しています

るはずです

JAPAN KUTANI」の魅力も発見でき

の窯が出現し、それぞれに素晴らし 襴手の永楽(えいらく)窯など数多く くべい)風、古九谷の再興を目指した 再興九谷以後、 赤絵細描画の宮本屋窯、 春日山窯の木米

います。各代それぞれ優れた個性と研 画風を作り出してきました 徳田八十吉は、代々続く九谷焼の陶 現在四代目がその系譜を継いで

明暦元年)に加賀藩の命により、 江戸前期 1655 5 有

で陶技を学んだ後藤才治郎が、

九谷村で開窯したのが始まりとされて

彩釉壷瑞穂

ケ丘美術館・別館